



手や足を動かさないという指令は脳から背骨の中を走る脊髄を通して伝えられます。また、痛い、冷たいなどの感覚は手足の末梢神経から背骨の中を走る脊髄を通して脳に伝えられます。

この背骨の中の脊髄に空洞ができてしまうと、脳からの指令がうまく伝わらず筋力が低下することがあります。また、手足の感覚がうまく脳へ伝わらず感じにくくなることもあります。

特に、多いのは感覚障害、その中でも熱い、冷たい、痛いなどの感覚が鈍ってしまう温痛覚障害です。典型的なものはジャケットタイプの温痛覚障害です。腰までいかない長袖のショートジャケット、そう女性では長袖のボレロを想像してみてください。両方または片方の胸から肩、腕、手にかけて温痛覚が低下します。

温痛覚障害とは、例えばお風呂のお湯をかき混ぜるのに、湯船に手を入れます。この時の湯加減が、熱いのか？ぬるま湯なのか？いまいちわからなくなってしまいます。また、もっとひどくなると、知らないうちに熱いやカンに手を触れ、やけどを負っていたのに熱いと感じてなかった、知らないうちにガラスで手を切っていたのに痛いと感じてなかった、このようなことがおこります。でも触った感覚、触角は比較的保たれますので、実際にやけどやけがをしなければ感覚に障害があることに気が付かないことがあります。

では、どうして温痛覚が障害されるのでしょうか。脊髄空洞症では主に脊髄の中心部に空洞が形成されます。触った感覚、つまり触覚の神経は脊髄の同じ側を登って脳へ情報を伝えます。これに対して熱い、冷たい、痛い、温痛覚の神経は一度脊髄の中心部を経由して反対側にわたり脊髄の反対側を登って脳に情報を伝えます。中心部の空洞に温痛覚が阻まれ、温痛覚障害が起きてしまいます。特に頸の部分の脊髄、頸髄に好発しますので腕や手の温痛覚障害がおこりやすくなります。

脊髄空洞症の原因は何でしょうか？いくつかありますが、最も多いのはキアリ奇形Ⅰ型といって頭蓋骨の後ろ下部分が先天的に狭い人がいます。狭い部分に小脳、延髄、脊髄が窮屈にひしめき合うと髄液の流れが滞り代償的に脊髄の中に髄液がたまり空洞ができてくるといわれています。治療は、まず手術で狭くなった頭蓋骨の後ろ下の骨の一部を削って窮屈さを解除します。すると脊髄空洞も徐々に消失してきます。難治のものには小さなチューブを入れることもあります。ほとんどは骨の一部を削ることで改善します。

お風呂の湯加減がわかりづらくなっていませんか？
知らないうちに火傷や怪我をしていませんか？

脊髄空洞症のお話でした